

社会教育「教材資料」作成の方法と課題（2）

「アメリカ南北戦争」の授業

梅野正信（一. 二. 三. 四. 八）,* 川野恭司（五. 六. 七）**

（1990年10月15日 受理）

A Study of Education Materials for the Social Studies.

— through the Studying about “The American Civil War” —

Masanobu UMENO, Kyoji KAWANO

一. はじめに —無自覚的アメリカ像と歴史認識—

本論は、「アメリカ南北戦争」について、その教材化の視点と課題を整理し、具体的授業プランを構想する試みである。

筆者は、先に「日本史教育における「荘園」制学習の考察」において、特に、その「取り扱いが困難とされる題材のなかからテーマを設定」する旨を表明しておいたが、今回の「アメリカ南北戦争」の授業改革提案も、また、同様の趣旨を引き継ごうとする共同研究である。¹⁾

したがって、前記小論でも触れたが、歴史教育の側が、歴史学の研究成果を「受け身」的に活用するのでは無く、あくまでも、「一時間の授業を成立させ、授業に子どもたちを引き入れていく」視点から、すなわち、歴史教育研究・実践に支軸を据えた上で、歴史研究の成果を活用し、歴史教育の方法・内容を再吟味していこうとするものである。

ところで、そのテーマの「取り扱いが困難」と認識される要素は多様な形で存在するのが常であるが、中でも、本論が考察対象とする「アメリカ南北戦争」の授業に関しては、特に、アメリカ合衆国に対する日本人の歴史認識の問題を、授業化にあたっての最大の留意点として、まずもって指摘しておきたい。

この点については、世界史教育論を提起している鈴木亮氏が、朝鮮史認識に関してではあるが「高校生だから、既成の世界史像があるというのではない」「自覚的か無自覚的かは別にして、小学生も高校生も自分の世界史像をもっていて、教師あるいは友人の出してきた世界史像とぶつけあいながら、いままでの自分の世界史像を守ろうとしたり、修正しようとしたりする。」とのべている。²⁾

鈴木氏の指摘は、そのまま、本論が対象とするアメリカ史にもあてはまる。すなわち、「アメリカ史についての知識は乏しくともアメリカ像はもっている」という現状認識は、一般に受け入れる

* 鹿児島大学教育学部

** 鹿児島大学教育学部附属中学校

ことが可能なところではないだろうか。

社会科歴史教育に限らずとも、生徒たちが学習以前に持っているであろう自覚的・無自覚的な社会像や歴史認識の存在は、授業化の前提として常に検討されることが必要であるが、そういう意味においては、アメリカという国と、その歴史に対する我々日本人の知識は、歴史的知識・認識より先に、勝手にその社会像・歴史像を定着させてしまっている国の一つではないだろうか。

世論調査によると、「アメリカが好きだ」とする日本人は、1950年に66%でピークを記録するが、以後、徐々に下降線をたどり、1974年前後には20%を割り込むまでになった。また1952年には行きたい国のトップ(64%)であったアメリカは、1973年には9%まで落ち込み、同年には31%から41%へと増加したヨーロッパに逆転されている。

また、「アメリカ好き」が底辺に近づいていた1971年の調査では、「自由主義国の先頭に立ち、世界の安定に尽くしている国(26%)」に対しては「他国に介入して独立を脅かしている国(31%)」、「経済力が大きく、生活が豊かな国(41%)」に対しては「不況や失業など、経済的に悩んでいる国(31%)」、「自由と平等が尊重され、活気にみちた国(17%)」に対しては「人種や貧富の差が大きく、まとまりのない国(40%)」となっており、この間、アメリカに対する、敗戦直後の「バラ色のアメリカ」像はかなり修正され、これを相対化するに可能ないくつかのイメージが形成されてきている。³⁾

戦後40年以上経て、当初の単一志向は大きく変化したものの、やはり、アメリカに対する友好的意識は強く、全体として欧米志向は日本人の強い傾向としてみられること、しかしながら「自由」「豊か」「平等」な社会であるとする「バラ色のアメリカ」像は、「戦争」「失業」「人種差別」という相対的イメージを持つまでになっていることは、重要な変化として留意したい。

しかしながら、世論調査の解説は、これらの変化が、1960年代から70年代にかけての、ケネディ暗殺、ベトナム戦争、日本での安保反対運動など、同時代アメリカに対するマイナスイメージが影響を与えた側面を強く持っている、と指摘しているが、だとすれば、アメリカ像を相対化させる「戦争」「失業」「人種差別」のタームは、必ずしも、その歴史的な背景や、問題発生のプロセスを踏まえた上で形成されたものとはいえない。

それでは、学校教育は、この点について、どのような役割を果たしているのだろうか。たとえば、1984年に実施された全国の高校生(3,892名)を対象とするアンケートでは、「もっとも親近感を持っている」国として、やはり、北アメリカが36.7%と断然トップだが、親近感を持っている理由については、「生活様式」が一位で42.3%を占めている反面、政治的、経済的、社会的な「歴史と伝統」と答えたのはわずか8.5%となっている。⁴⁾

このことは、学校教育の期間内においてさえも、必ずしも、歴史的学習にもとづく歴史認識の形成を土台とした「アメリカ」像が形成されているわけではないという事実を、傾向として示しているものと思われる。

だとすれば、学校教育は、これまで子供たちに、どのようなアメリカ「像」を提供してきたのだ

ろうか。「アメリカ南北戦争」の授業改革提案を検討する前に、この問題に一定の考察を加えておきたい。なぜならば、南北戦争の授業が、子供たちの「アメリカ（史）像」の、どのような側面を形成させるのに必要な授業であるのかが、まずもって、あきらかにされる必要があるからである。

二. 戦前・戦後初期の学校教育におけるアメリカ像と「南北戦争」

日本が、1941年12月8日に真珠湾を攻撃し、アメリカとの全面戦争を開始してから、日本人の対米意識は、国策としての敵対的イメージが強調されることになり、その教育的役割を荷うために、「皇国ノ道ヲ修練セシメ特ニ国体ニ対スル信念ヲ」⁵⁾ 深める目的をもって、同年四月、国民学校が発足する。

当時、街角には、ルーズベルトやチャーチルの似顔絵の吊り看板に米鬼、英鬼の文字が踊り、掲示板には、「鬼だ、獣だ、わが勇士の聖骨を！！刺せ！殺せ！撃て！米鬼！！」などのポスターが所狭しと貼られていたし⁶⁾、ある国民学校では、「運動場の入口にルーズベルト米大統領、チャーチル英首相の似顔絵の貼ったわら人形を立て、登校する子どもたちがかならず竹やりでそれを突いて運動場へ入るようにさせた」りしたという。⁷⁾

この時期に発行された、国民学校用教科書『初等科地理』下では、欧米に関しては、「太平洋とその島々」の中でパゴパゴは「米國海軍根拠地」として紹介され、フィジー諸島では「英國人が来るようになっていろいろの病気に感染して人口はどんどんへりました」とあり、欧米列強による植民地下の悲劇的な事柄のみが、その対象として描かれている。⁸⁾

国民学校以前、すなわち昭和16年以前の、特に初等教育（義務教育）における教科書はどうだったのだろうか。（（）期を示す）⁹⁾

これらの教科書の、欧米、とくにアメリカの扱いをみると、国語教科書に現れた西洋人は、3（Ⅰ）6（Ⅱ）11（Ⅲ）9（Ⅳ）3（Ⅴ）となっており、中でもアメリカ人は、0（Ⅰ）1（Ⅱ）3（Ⅲ）4（Ⅳ）0（Ⅴ）と、西洋人の中では最も多く、人名としては、フルトン・ベル・リンカーン・クラーク・エジソン・ラングレー・ライト兄弟・マリーなどが取り上げられている。¹⁰⁾

また、Ⅲ期の『尋常小学 国語読本』では、第一次世界大戦後の国際協調的な時代背景を反映して、第四学年用の「アメリカだより」では、「シカゴとニューヨークの間は九百八十哩もありますがおとうさんは最大急行の列車に乗って、たった十八時間で着きました。日本にはまだこんな早い汽車はありません。」「ニューヨークは人口からいへば、ロンドンに次ぐ大都会で、七百万以上もあるといひます。高い建物のあることは世界第一で、十階・十二階の家はいくらもあります。中でも最も高いのは五十五階もあります。地上の鉄道には勿論、高架鉄道にも、地下鉄道にも、電車や汽車が終日終夜、休みなしに運転しています。」¹¹⁾（ニューヨークから）など、アメリカに対し、その高い文明を仰ぎ見る姿勢をとっている。

同様に修身教科書では、登場する欧米人の数は、13（Ⅰ）5（Ⅱ）5（Ⅲ）6（Ⅳ）1（Ⅴ）、

うち、アメリカ人は、3 (I) 2 (II) 2 (III) 3 (IV) 0 (V) となっており、「自立自営」「規律正しくあれ」「公益」「勤労」「修得」「反省」を教える人物としてベンジャミン・フランクリンを、「勉学」「正直」「同情」「人身の自由」「公正」「寛容」を教える人物としてアブラハム・リンカーン、「正直」「度量」「謙遜」を教える人物としてジョージ・ワシントンなどが登場している。¹²⁾

地理教科書では、どうだろうか、いわゆる欧米を扱った世界地誌の割合は、頁数でいうと、I期 0/141, II期 5/136, III期 17/199, IV期 35/333, V期 0/303と、IV期まで欧米の割合は増加してきていたし、特にアメリカは、III期で7頁、IV期で13頁と著しく増加する傾向にあった。¹³⁾

以上、戦前の、おもに尋常小学校、国民学校を中心に、世界的教材の中から、主に欧米に関する記述を中心に、国語・修身・地理の教科書をみてきた。

ここでは、第V期の国民学校用教科書の直前まで、すなわち、日本の真珠湾攻撃の直前まで、日本の初等教育は、意外にも、欧米、特に、アメリカに対してはきわめて友好的で、高い、進んだ文化を持つ国として扱われてきたことが認められる。

それでは、なぜ、短期間のうちに、社会的・政治的側面だけでなく、教育教材として、さらには内容として、180度の転回をすることが可能だったのだろうか。それほど、欧米に関する「志向」は内容の無いものだったのだろうか。この点について、筆者は、戦前の教科書にみる世界的記述が、同時代的比較に偏っており、そのため、日本とは異質の文化・歴史をもった国であるとの認識を欠如したまま、先進地域としての「追いつき・追い越す」対象としてのみ意識される傾向にあったこと、そのため、短期間の内に、内外の社会的情勢に左右され、簡単にその社会像を変換させてしまう危険性をもっていたこと等を、とりあえず指摘しておきたい。

それでは、戦後の学校教育においては、このような否定的側面は改善されたのであろうか。筆者の限られた知見の範囲では、戦後初期の教材観は、戦前に脆弱であった歴史認識の学習が、必ずしも十分に改善されたとは認められないのである。

戦後初めて公刊された学習指導要領 (昭和22年) では、占領軍の中心国アメリカについて特に重点的に理解させようとしている。学習指導要領社会科編 (II)・中学校第二学年の単元一では、学習活動の例64項目中7項目が北アメリカにあてられ、開拓の歴史、移住の歴史、コロンブスの新大陸到着までの過程、インディアンの分布と生活、など、かなりの比重を占めているし¹⁴⁾、同じく単元三でも学習活動の例76項目の内、北アメリカだけで16項目が費やされている。¹⁵⁾

次に第一次改訂学習指導要領 (昭和22年) では、社会科編 II (試案) 中学校一般社会科第一学年の第3単元は「われわれはアメリカの人々の日常生活から、どんな点を学んだらよいか」と、学ぶ対象としてのアメリカが提示されている。¹⁶⁾

この時期の小学校用教科書『新しい社会』六年上 (東京書籍1950) は、次のようにアメリカを紹介している。

「アメリカの大都会でいちばんおどろいたことは、十階二十階の高い建物が、ぎっしりならんでいる事だった。道に立って空を見上げると、谷底にいるような気持ちだったよ」

「これは百二階だよ、エンパイヤ・ステート・ビルディングといって世界で一番高い建物だ、この上にのぼると、道を走っている自動車やバスなどはまめつぶのようにしか見えなかったよ」松村吉郎氏は、上記の部分引用しながら、戦後初期の社会科教科書が、アメリカを日本の目指すべき未来像として、先進資本主義国としての高度な都市生活像としてとらえていることを、その特徴として指摘しているが¹⁷⁾、この教科書において、前節で紹介した「アメリカだより」とほぼ同様の描写がなされていることは、改めて指摘するまでもないだろう。ことアメリカ像に関するかぎり、太平洋戦争の4年間のエポックを挟んで、1950年前後までは、理想としてのアメリカ像が一貫して描かれてきたことは明らかである。

すなわち、学校教育におけるアメリカ像は、昭和16年に180°転回した後、4年を経て、また180°転回して、歴史認識学習が抜け落ちたまま元に戻ってしまったにすぎないのである。

それでは、この、欠落した歴史認識を育むためには、どのような学習が準備される必要があるだろうか。換言すれば、冒頭で指摘したアメリカ像を相対的な価値観で理解するには、どのような学習が必要であるだろうか。本論は、次節以降で、本論の中心課題である「アメリカ南北戦争」についての考察を開始するわけであるが、この主題こそは、たとえば、「自由」「豊か」「平等」な社会であるとともに、「戦争」「失業」「人種差別」という相対的な価値観をアメリカ像の実体として学習するに、必要かつ不可欠なものであると思われる。

それは、いうまでもなく、アメリカの対外膨張政策、先住インディアン、黒人問題などが、ほかならぬ、南北戦争を契機として顕在化したためであり、それ故にこそ、これらの問題を歴史的に学習するには、南北戦争を中心とした学習が大きな比重を持つことになるからである。

三. 戦後教育における「南北戦争」の取り扱いの変遷

南北戦争が義務教育課程の教育内容として設定されたのは戦後の新制中学校の社会科においてである。とりわけ、昭和33年度版学習指導要領より中学校社会科は、三分野制に統一され、明確に歴史的分野が設定された。

以下に、南北戦争の経緯の後で、南北戦争の歴史的意義について解説している部分を比較してみよう。

- ①「その後、合衆国の経済的な発展は飛躍的に進み、やがてハワイからフィリピン・中国への進出をみるようになった」（『中学校社会科 歴史の流れ 全』（昭和31年修文館P207）
- ②「南北戦争を経て、しだいに民主主義の国家として成長していったことにも触れる必要がある。」（昭和34年『中学校社会指導書』（文部省 P120）
- ③「この内乱がおさまってから、アメリカは、国民的な統一をかたくし、また民主主義をいちだんと進めた。」（『中学校の社会科 近代の世界と日本』（豊田武他 中教出版昭和44年改訂版P21）

上記の教科書に表れているように、昭和43年度版学習指導要領までの叙述は、南北戦争については、国家統一と、民主主義の発達を中心に肯定的側面のみの記述になっている。ところが、昭和52年に実施された学習指導要領の改訂以降では、次に示すような変化が見い出されるようになった。

- ④「その後、アメリカは、統一を回復し、豊かな資源を持つ広い国土に多くの移民を受け入れて、資本主義を発展させていった。また、民主政治も発展したが、黒人に対する差別は残り、いまでも大きな問題となっている。」(昭和59年発行中教出版『中学校の社会科 日本の歩みと世界』P153 木村尚三郎, 谷口五男, ほか)
- ⑤「この結果、合衆国の分裂はさけられ、北部を中心に資本主義工業が急速に発達するようになった。しかし、南部の黒人奴隷は貧しい小作農となり、黒人に対する社会的な差別と貧困は、現在まで未解決の問題として残っている。」(教育出版『新訂中学 社会歴史分野』昭和64年発行昭和61年検定 P164 大江一道, 鳥海靖ほか)
- ⑥「南北戦争の間に、リンカーンは奴隷解放令を出し、戦後、法律上は黒人に白人と同じ地位を認めた。しかし、黒人の生活は向上せず、今でも黒人に対する差別が根強く残っている。」(日本書籍『中学社会 歴史的分野』土井正興, 黒羽清隆, 吉村徳蔵ほか 昭和55年検定 57年発行P163 昭和64年発行 昭和61年検定も同じ)
- ⑦「産業は、こののちめざましい発展をとげた。しかし黒人は、奴隷制度が廃止されたのちもさまざまに差別を受け、白人の大農場主のもとで苦しい生活を続けることをよぎなくされた。」として、コラムで「アメリカ黒人の音楽」を設定し、黒人霊歌、ブルースやジャズとの関連などを説明している(東京書籍『新編新しい社会 歴史』昭和62年発行 昭和61年検定P173 加藤章, 駒井健, 平田嘉三 ほか)
- ⑧「インディアン戦争にも触れて、真の解放の意味を考えさせる。」(大阪書籍発行指導書P198 昭和58年検定教科書用)

上述のとおり、④以降の、昭和52年度版学習指導要領以降の教科書の多くは、黒人問題を中心とした人種差別の存在を指摘するもの、アメリカ黒人の音楽をとりいれたり、指導書ではあるが、インディアン戦争を指摘するものなどもあらわれてきている。

ところが、教科書の、上述のような変化にもかかわらず、他方では、学習指導要領においては、特に、この間、南北戦争に関する解説の内容に変化が在ったわけではない。それどころか、南北戦争については、解説が「なされていない」点では一貫している状況にあるのである。昭和52年発行のものと、昭和44年発行のものでは、どちらも、「イギリスの革命、アメリカの独立、フランス革命に触れながら」近代民主政治の基礎が築き上げられていったことを理解させ、それ以降は、アジアへの進出との関連において扱う点に限定され、「ペリー来航の背景」の箇所では触れられているに過ぎないし、また、平成元年に改訂された学習指導要領でも、『中学校指導書社会編』(文部省平成元年)において「わが国の近代化に影響を与える世界史的な背景としてのヨーロッパ諸国における近代社会の成立と海外進出の動きを理解させるのがねらい」であると、世界史的内容の範囲を、む

しろ以前より限定した内容になっている。¹⁸⁾

したがって、上述のような変化は、学習指導要領および解説を、その背景として持っているわけではないのである。¹⁹⁾

四. 戦後におけるアメリカ史研究と教育実践

それでは、教科書における、前述のような変化は、何を背景にしたものなのだろうか。このことに関連して、次に、日本におけるアメリカ史研究、および教育実践の成果を概観してみたい。

というのは、これらの二つの領域における研究、教育活動の積み重ねが、教科書叙述に与えた影響は無視できないものであると考えるからである。

(a) アメリカ史研究の成果と課題

富田虎男氏はアメリカにおける歴史研究の流れを、帝国学派、革新主義史学、新保守史学に整理して紹介した上で、アメリカの植民地時代に関しては、イギリス帝国全体との関連の中で、黒人、インディアンの「抑圧と掠奪」を受けた側からの「重層的な支配・従属の構造のなかで捉えられねばならない」とし、「ヨーロッパ人中心の考え方」を批判した上で、「バンクロフト流の愛国主義史観も、それを批判した革新主義史学も、さらにそれを批判した新保守主義も、総じてアメリカ史学の主流は、もっぱらナショナルな視点に立つものであり、インディアンとニグロはその視点から抹殺あるいは軽視されてきた」と指摘している。²⁰⁾

さらに富田氏は、南北戦争に関わる研究上の課題について次のように整理している。

第一に、イギリス資本主義・南部奴隷制綿花経済・東北部商業資本・北西部穀物生産の各地域の特色とその関係を明確にして、戦争勃発に到る、南北の妥協（1850年の妥協）の経緯などを詳細に検討することの必要性。

第二に、「テリトリへの奴隷制拡大をめぐる国内の対立矛盾を外に転化する方策として、ピアス大統領のもとで商業的膨張やテリトリそのものの拡大がはかられた」側面や、「ベリーの派遣による日本の開港、ハワイ併合の試み」や、「国内におけるアメリカニズムの高揚、非アメリカ的なものの排除、インディアンの征服、移民の排斥」などの側面の考察。²¹⁾

第三に、南北戦争による奴隷解放が「黒人の人間としての解放に、直接つなが」らず、「黒人奴隷の奴隷身分からの法的な解放と一時的・部分的な政治的解放にすぎず、実質的な政治的・社会的・経済的・文化的解放はなされなかったこと」への留意。このことからくる、「奴隷解放の英雄」リンカーン像の再評価。富田氏は「リンカーン自身の書いたこと、言ったことを読むこと、その意味合いを歴史的な背景の中で正しく読みとること、そして自分自身のリンカーン像を築くこと」の重要性を指摘する。²²⁾

第四に、南北戦争が今日に到るアメリカ史上最大の犠牲を払った戦争であるとの認識。南北戦争では、双方合わせて420万の兵力が動員され、四年間の死者は62万人に達した。この戦死者数は、

「独立戦争からベトナム戦争にいたる合衆国の対外戦争での犠牲者の合計をも上まわる」ものであることの理解。このことは、1860年のアメリカの総人口が3144万であること、また、第二次世界大戦におけるアメリカの戦死者が29万人であったことと比較しても、この戦争における死者の数字が異常に多かったことがわかる。²³⁾

第五に、「南北戦争を合衆国一国内の事件としてのみ扱うべきでなく、南北戦争をとりまく諸外国との関係をつかむこと、である。²⁴⁾

(b) 「アメリカ南北戦争」に関する教育実践の比較検討

学習指導要領の取り扱いに大きな変化が無い中で、個々の教育実践は、前述の研究成果を比較的意欲的に活用し、また、歴史教育独自の問題と教材研究を進めてきていた。前節で指摘した、教科書叙述に表れた変化も、これらの実質的な教育活動の流れを一定反映してきたものと思われる。

さて、授業提案の傾向は、おおきく三つの側面に整理される。

最初に、子供たちの学習以前のアメリカ史像の改革を提案するものがある。1976年6月号の『歴史地理教育』（歴史教育者協議会）は「社会科とアメリカ」を特集したが、第1章で指摘したように、この時期、アメリカはベトナム戦争終結（1975）直後にあたっており、戦争を通じて、日本人の対アメリカ幻想は大きく変更を加えられていた。

したがって、難波達興「アメリカ史像の再構成」、滝尾紀子「中学・高校生のアメリカ像」、鈴木亮「アメリカとの出会いとそのとらえ方」、本多公栄「アメリカとベトナムをどう教えたか」などは、それぞれの立場から、生徒たちのアメリカ像をどう変革するかという問題に取り組んできた実践報告である。

これらの報告は、子供たちがアメリカに抱いていた、「豊か」で「自由」で「平等」の国アメリカという幻想が、ベトナム戦争に象徴される対外戦争や、国内にかかえる黒人問題や貧困の実態を知ることによって、そのイメージを変えていったという点で共通していた。

滝尾紀子氏は、「中学・高校生のアメリカ像」（『歴史地理教育』1976.6 251 P41）で、「アメリカといわれて思いつくこと」という質問に、ほぼ共通して解答があった項目として「リンカン、ワシントン、ケネディ、ベトナム戦争、自由の女神、ロッキー山脈、宇宙開発、原爆、インディアン、星条旗、ディズニーランド、人種差別、西部劇等々」と報告しているが、この点は現在でも、そうおおきく変化しているとは思えないし、冒頭に述べたように、今なお、固定化されたアメリカ像の改革は、現在の課題の一つであるといえよう。

次に、歴史学習の中で、どのような学習内容として授業を形成していくか、という点からの具体的提案がなされるようになった。

中でも、先住インディアンの問題と、黒人奴隷の問題は、アメリカへのヨーロッパからの植民活動、独立戦争、南北戦争、対外膨張の流れの中で、関連づけて捉えるべきとの視点が提起されたが、その中心的実践者難波達興氏の試みは、歴史教育における「南北戦争」の位置付けを、研究成果をふまえながら、意欲的に具体化させたものとみることができよう。²⁵⁾

他にも、アナール派のマルク・フェローによる『新しい世界史—全世界で子供に歴史をどう語っているか—』（1985. 10 新評論）も、上述の視点から歴史叙述を紹介している。

また、南北戦争において、リンカーンの奴隷解放宣言が出された経緯、背景、また、リンカーンが南北戦争で何を目的としていたかという点についても、槐一男氏が「リンカーンは奴隷を解放したのか」（『歴史地理教育』410号 1987. 3）の中で、この視点から解説を加えている。他にもリンカーンを扱ったものは少なくないが、これらの、リンカーン像を再認識・再評価する作業の中で、リンカーンが、実質的奴隷解放よりは、むしろアメリカの国家統一を優先させようとした1858年演説以来の立場、それが、何故、奴隷解放宣言に発展したのかを、諸外国とくに、イギリスへの対応を中心に考えること、南北戦争で、南部が敗北したにもかかわらず、なぜ、今日まで、黒人差別が問題として残ったのかを、黒人解放の不徹底な実態（1877年の妥協、シェアクロッパー制の確立など）をもって考える、等々、南北戦争の事実認識の根幹にかかわる問題を教育実践の課題として提起されることになった。

最後に、子供たちの興味関心を高めるための工夫が、数多く試みられてきたことを指摘しておきたい。

たとえば、「アンクル・トムの小屋」を使って、奴隷制度の歴史、問題、南北戦争、などを、小学生に教えた名雪清治「『アンクル・トム』を扱って」（『歴史地理教育』278 1987. 6）実践、映画「シェーン」の話や、「ボストン・バッグ」の話、『自由への地下鉄道』（ハリエッタブマンの話）などを通じて、南北戦争を扱った中学校での三上満「南北戦争をどう扱ったか」（『歴史地理教育』243 1975. 11）実践。

また、「ヤンキー・ドゥードゥル」「ジョニーは兵隊に」（独立戦争）「星条旗」（英米戦争期）「いとしのクレメンタイン」（西部開拓期）「深い河」「行けモーゼ」「ジョン・ブラウン」「おお自由よ」「聖者が町にやってくる」（南北戦争とその後）というような、子供たちにも親しみのある、アメリカ民謡、黒人霊歌、などを使って、その歌詩の歴史的背景を説明する中で、アメリカ史について考えてもらおうとする難波達興「アメリカ史学習で使える民謡教材」（『歴史地理教育』407 1987. 1）実践。

ほかにも、TV番組「大草原の小さな家」を通じて、南北戦争後の西部開拓を理解する素材とするものに、綿引弘『手に取る世界史教材』（地歴社1987）や、猿谷要氏の問題提起、などがある。

『文学作品で学ぶ世界史』（寺沢精哲編 山川出版1985）は、アメリカ・インディアンの問題について『わが魂を聖地に埋めよ』（ディー＝ブラウン 草思社）、南北戦争と黒人問題については、『風と共に去りぬ』（M. ミッチェル 新潮文庫）などを紹介している。

以上、ここでは、戦後の日本における、アメリカ、中でも、南北戦争に関する歴史研究者側の見解を整理し、同時に、教育実践の流れと傾向を概観し、相互関係に注意しつつ、まとめてみた。

五. 「アメリカ南北戦争」授業化の方法と分析視点²⁶⁾

前章までの、アメリカ史及び「アメリカ南北戦争」に関する、歴史認識、教科書、研究史、実践史等々の概括的整理と検討に続いて、本章では、具体的な授業提案及び分析を試みたい。

「アメリカ南北戦争」の授業は、単元としては「産業革命と欧米諸国の発展」に位置付けられることになる。はじめに、単元全体の流れの中で、次の点をふまえておきたい。

「すすんだ」ヨーロッパ・アメリカによる「おくれた」アジア・アフリカの植民地化という形での世界の一体化、これが19世紀の世界史展開の要約といえる。この「すすんだ」ヨーロッパ・アメリカの原動力こそは、市民革命・産業革命による近代国家の形成に他ならなかった。

まずイギリスを中心に産業革命の進展を具体的につかませ、資本主義の確立により空前の「豊かな社会」が実現したことを理解させる。しかし、この豊かさを文字通り享受したのは資本家階級であり、大多数の労働社会級は劣悪な労働条件の下、苦しい生活を余儀なくされた。ここに労働運動や社会主義運動が高まってくる必然性があったことをつかませたい。次に、これらの影響としてのヨーロッパ各地における民主主義運動、民族独立運動を概観させる。この過程でブルジョアジーが一定の進歩的役割を果たしつつもやがて反動化の方向を強める点をこの後の世界史展開ともかかわっておさえておきたい。アメリカの内乱（南北戦争）もまた以上のヨーロッパの流れと基本的には対応するものなのだが、今一つ黒人奴隷制度をめぐる闘いであったという点に一国史をこえた世界的意義があったといえよう。なお、北部勝利後も黒人差別は根強く残り、原住民問題とともに今日のアメリカのとらえなおしが求められている点に南北戦争～「合衆国の発展」学習の独自の意義があると考えることができる。

以上のような全体像の中で、本論が対象とする「アメリカ南北戦争」について、私は、かつて、「南北戦争は奴隷制の是非をめぐる戦争だったのか。南北の対立はむしろ保護貿易か自由貿易か、国家の統一か分裂か、をめぐるものではなかったか。奴隷解放宣言交付＝1863年は開戦の2年後である。『奴隷解放』によって南部離反が決定的なものになることをリンカーンは恐れていた。むしろ63年以後『奴隷解放』は戦争の主要な問題となっていく」ととらえていたことがある。しかし、上記のような南北対立の段階論は訂正されなければならないと今は思う。すなわち、リンカーンはたしかに南部の離反をおそれていたが、戦争はリンカーンのおもわくをこえて始まり展開したのであった。奴隷制が戦争の主要な問題でないとやっきになって主張していたのは、むしろ当時のイギリスの新聞論調だったのである。やはり、この戦争の主要な性格ならびに世界史的意義は奴隷解放問題に他ならなかった。なによりも南部の開戦の理由がこれをものがたっている。つまり、南部はイギリスとの結びつきをつよめつつ奴隷制プランテーションを存続させ西部に拡大しようとしていた。一方、産業革命を達成した北部にとって、土地所有そのものを近代化し、黒人を自由な労働者として確保し、全国的統一市場をつくりだすことは資本主義の発展に欠かせぬことであり、奴隷制プランテーションの拡大などとうてい許しがたいものだったのである。

戦いは北部の勝利におわり、ここに国民的統一国家アメリカ合衆国の飛躍的發展の礎が築かれる。だが、黒人奴隷の真の解放は、実現しなかった。そしてここに現在のアメリカの問題もあるといえよう。

たとえば、教科書の説明に「……アメリカの發展のかげには多くの黒人やインディアンのごせいがある」²⁷⁾と書かれているが、この「發展」や「かげ」の内実のとらえなおしが必要である。ちょっと考えてみれば「開拓」とは原住民の圧迫・追放に他ならないことは分かるわけだが、問題はこれをいかにリアルに、いずれの立場からとらえるかである。「我々とインディアンの戦争はほとんどたえまなかったといわれる。われわれは一貫して不正だったのであろうか。ためらうことなく答える。そうだ、と。」(1867年太平洋部族との講和交渉に派遣された合衆国使節団の報告書～富田次雄「アメリカ・インディアンの歴史」)。歴史の發展とは、ゆたかさの増大であるとともに虐げられ抑圧された人々がより大きな自由をかちとっていくことにあるとすれば、インディアン・黒人問題は「かげ」などにおいておかず、明確に位置づけねばならない、その際、これらの人々の悲惨さのみでなく、誇りや力、美しさについても言及できたらと思う。最後に、授業としてはこの後になるのだが、日本と南北戦争とのかかわりについていえば、ペリー、ハリスによる強制開国、不平等条約締結後のアメリカの対日進出がいったん中座をよぎなくされるという、日本にとっては有利な世界史的条件の一つが形成されることをも、ここで確認しておきたい。

次に上記の認識をふまえて、具体的に、この一時間の目標とする視点であるが、まず(1)合衆国の西部開拓は、原住民(インディアン)からの土地掠奪に他ならず、また南部の「發展」は黒人奴隷の犠牲の上に成り立ったことを理解させる。次に(2)南北戦争の根本に、産業革命に端を発した奴隷問題(存続か廃棄か)があり、北部の勝利によりアメリカ合衆国の資本主義は飛躍的に發展するが、黒人の差別は残ったことを理解させる。さいごに(3)原住民や黒人の立場からアメリカ合衆国の「發展」を見つめる態度を育てる。

以上の三点をかかげておいた。一方、生徒たちの学習行動にかかわる目標としては

- (1)西部開拓によるインディアンの圧迫を具体的にとらえることができる。
- (2)南部の奴隷制プランテーションの実態について説明できる。
- (3)南北が各々自由貿易と統一、保護貿易と分裂を主張していた背景をおさえ、北部勝利によりアメリカ資本主義が飛躍的に發展することを指摘できる。
- (4)北部勝利の原因が「奴隷解放」にあり、だからこそヨーロッパの労働者階級に支援されたことの世界史的意義を洞察できる。
- (5)黒人奴隷の悲惨さや自由への欲求を自分のこととしてとらえるとともに、自分のうちにある差別・偏見についても考える態度をもつ。

の五つ実現をめざすことにした。

次章で、具体的な授業内容の分析と提案を試みる心算りであるが、その前に次ページに教授・学習過程の全体を図示して²⁸⁾おきたい。

学習問題 主な発問	学 習 活 動	学習内容と情報提示	時間	指導上の留意点 その他
<p>◦これは何の場面か 〈問題の把握〉</p> <p>南北戦争はどのようにおきたのか。戦後奴隷はどうなったのだろうか</p> <p>〈本質究明〉</p> <p>◦インディアンはどうしたか</p> <p>◦西部で南北対立した原因は何だったのだろうか</p> <p>◦黒人奴隷の実態は</p> <p>◦リンカーンは奴隷制をどう思っていたか</p> <p>◦イギリスなら南部に応援するか(戦争干渉)</p> <p>◦イギリスが応援しないから北は勝ったのか</p> <p>◦北部勝利でアメリカはどのように変化、発展するか</p> <p>〈洞察〉</p> <p>◦差別はなぜ残ったんだろう</p> <p>◦黒人、インディアンにとって、アメリカ合衆国の発展とは何を意味したのだろうか</p>	<p>開始</p> <p>南北戦争のパネル、VTRを見て原因や結果を予想する 1</p> <p>学習問題を設定する 2</p> <p>西部開拓についての説明を聞き合衆国の発展がインディアンにもつ意味について考える 3</p> <p>補説</p> <p>確認 4</p> <p>黒人奴隷の歴史・プランテーション労働の実態についてのグループ発表を聞き、黒人の立場に立って解放への展望をのべる 5</p> <p>補説</p> <p>確認 6</p> <p>自由貿易と保護貿易、分裂と統一をめぐる南北対立の状況について説明をきく 7</p> <p>補説</p> <p>確認 8</p> <p>イギリスの行動について予想し話しあい、奴隷解放宣言の意義について考えを深める (討論) 9</p> <p>個・グループ・全</p> <p>補説</p> <p>確認 10</p> <p>アメリカ資本主義の飛躍的發展についての統計を読む 11</p> <p>解放後の黒人差別の実態についての説明をききその理由を考え発表する 12</p> <p>補説</p> <p>確認 13</p> <p>自己評価 14</p> <p>終了</p>	<p>パネル ゲティスバーグの戦い</p> <p>VTR 「風と共に去りぬ」</p> <p>TP1 西部開拓(板書) 1848 カリフォルニア金 鉱発掘 ゴールドラッシュ</p> <p>TP2 「開拓者よ、おゝ開拓者よ」</p> <p>TP3 奴隷制プランテーション 奴隷狩 奴隷市場 黒人霊歌 Go down Moses</p> <p>TP4 リンカーンの言葉 自由貿易、保護貿易 南部連合、連邦 奴隷州 奴隷解放 (板書)</p> <p>イギリスの綿業恐慌 1863年奴隷解放宣言 奴隷の北部逃亡 自由への地下鉄道 第一インターナショナルのリンカーンへの手紙</p> <p>TP5 鉄鋼生産の比較</p> <p>1865年リンカーン暗殺 シェアクロッパー (刈取小作人) 差別的低賃金労働 KKK 万延元年の遣米使節</p>	<p>3分</p> <p>7分</p> <p>10分</p> <p>5分</p> <p>15分</p> <p>8分</p> <p>2分</p>	<p>死傷者累々たる戦場シーンで戦争の臨場感をもたせ導入時のかまえとする</p> <p>予想は簡潔に、一斉問答による</p> <p>板書の構造化を工夫する</p> <p>個の活動Ⅰ (生徒発表)</p> <p>黒人奴隷の生活(一日の流れ、労働の実態、食事等)を具体的につかませる。</p> <p>黒人の悲しみ、苦しさ、希望や喜び、怒りに共感させたい</p> <p>産業構造の相異から政治的社会的対立を深めていくありさまを把握させる</p> <p>個の活動Ⅱ (討論)</p> <p>イギリスによる戦争干渉について予想させる</p> <p>〈もしイギリス人なら〉</p> <p>イギリスの誰たちにとってという視点の重要性を教える</p> <p>ハリエッタブマンの伝記を紹介する</p> <p>アメリカにおける人種差別の本質に目を開かせたい</p> <p>あわせて我々日本人は人種的偏見に無縁かどうか、若干のゆさぶりをかけておわりたい</p> <p>自己評価</p> <p>重要点・印象点・疑問点など自由に記述させる</p>

*黒人霊歌を後にまわすなど実際の展開は若干異なるものとなった。

六. 授業内容及び教材資料の検討と提案

ここでは、一時間の具体的な授業の流れの中で、どのような資料を、どのような形で生徒たちに提示し、何を伝え、何を考えさせ、何を得るのか、多面的な分析を加えていきたい。

基本的には、授業の流れに沿って提示・検討を加えていくつもりだが、生徒たちに提示した資料、その使用方法、授業記録（発問や発言）も適宜挿入して、コメントを加えていきたい。

a. 導入（教授・学習過程、学習活動の1～3）

導入はまず感性に訴えたい。かつてくり返し見て私が最も印象に残った映画の下記の部分を3分間に編集して提示する。‘Go down Moses’は後の「自由への地下鉄道」の主人公ハリエツト＝タブマン（彼女はMosesとよばれた）にも結びついていく。

資料① ビデオ「風と共に去りぬ」アメリカ映画²⁹⁾

敗色濃い南部。馬車で逃げまどうアトランタの人々。折しも、南軍に所属する黒人部隊が通りかかる。重い足どり、‘Go down Moses’を歌いながら。駆け寄るスカーレット。やがて彼女の目前に、アトランタの駅前に、広がり横たわる累々たる死傷者の群。南軍の国旗がひるがえり、フォスターのスワニーが流れる。……（3分間に編集）

資料② 開拓者よ（TP2）³⁰⁾

「過去をすべて捨ててしまい 我々は進出する さらに新しい さらに強大な世界へ
変化する世界へ その世界を 生き生きと力強く 我々はとらえる 労働と進行の世界
開拓者よ おお 開拓者よ」（Walt Whitman “Pioneers! O Pioneers!” より）

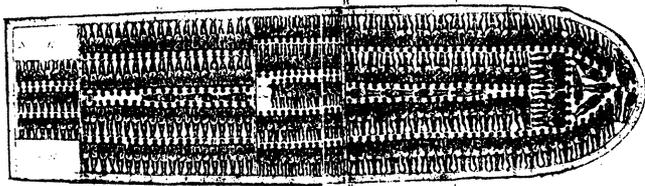
広大な西部の大草原に進出し、これを切り拓く雄々しい開拓者魂。私の大好きなホイットマンの長詩「開拓者」の一部である。西部開拓には夢がある。しかしそこには北と南の対立が鋭くもちこまれた。と同時に、原住民たるインディアンにとっての「開拓」とは何か、侵略（されること）に他ならなかったことを次の資料で考えさせたい。

資料③ ³¹⁾

「友よ。私の生まれ故郷への愛着は強い。だが今やそのきずなは断ちきられてしまった。我々は行かねばならない、見知らぬ土地に、さすらいの民として。私は行かねばならない……」（チョクトー族GWホーキンズ「アメリカ国民への訣別の辞」より）

b. 黒人奴隷制の学習

ここでは、次の資料④³²⁾ ⑤³³⁾を使って、下記のような生徒たちとのやりとりがあった。

資料④³²⁾ 奴隷船 (タイトパッカー)資料⑤³³⁾

授業記録 I (学習活動の5)

T₁ 一瞬僕がみたときに、ゴキブリの卵をポツと開けたときのような……

はい、これは船なんですね。船の中に横たえられた人間。つまり……

P₁ 奴隷

T₂ 奴隷なんですね。奴隷がびしーっと詰め込まれているわけね。これはアフリカの西海岸から大西洋を経て、アメリカの南部に積み込まれていく(奴隷船の)船底よ。天気がよかったときときどき甲板に出て来て、こうして日なたぼっこを、している場面なんですけど、これもびっしりですね。これね、タイトパッカーといって、タイトに、ぎしぎし詰め込んだという意味ね。これはね、こんな状態でつながれているわけですから、ふん尿たれ流しだね。

T₃ この奴隷船が通るとね、もう海の向こうの方からプンぷンにおったというほど、すさまじい不潔なのね。で、この中のほぼ4分の1ぐらいが死んだりしますね。だけどぶ残りがいいというわけです。だからこういう積み込み方をしたそうです。で、ルースパッカーというもっとゆるやかに入れたものもあるんですけど、これが多かっただらしい。そして、積み込まれていった先では、これは親子一緒に来る場合もあるんですけど、ひき離されていきますね。バラバラに。

ここに示したような状況の下で、しかし黒人奴隷たちは、ただ忍従していたわけでは無いことを

資料⑥⑦をもとに考えさせてみたい。私は次のように生徒たちに語りかけてみた。

資料⑥³⁴⁾

For many, running away to freedom was the only appropriate response to slavery. Polemical art like this emphasized the great danger involved.



資料⑦³⁵⁾

Margaret Garner, who killed two of her children rather than have them returned to slavery. When the remaining children were taken away, she committed suicide.



Woorland-Spingarn Research Center, Howard University

授業記録Ⅱ（学習活動の5）

T ⑥この船にのれば、なんとか助かるという見込みがあるのかな。犬が追いかけている。耐えきれずに逃亡する人がいたのだ。⑦これはちょっと読もうかな。マーガレット＝ガーナーは二人の子供を殺した。彼らを白人の手にもどすよりは、殺すことを選んだ。殺した、奴隷状態にもどすよりも。殺し切れず残された子どもが、連れさられたとき、彼女は自殺した。と書いてありますね。

c. 南北対立のプロセスと背景（学習活動の7）

奴隷制の悲惨、黒人たちの人間的な怒りへの共感を高めたあと、北と南の対立へ論議を深めていきたい。

授業記録Ⅲ

T: 何故北部が奴隷解放を主張するんですか。何故南部は解放に反対なのかな。（手があがりかける）ちょっと待って、念入りに答えてほしい。北には心優しい人が住んでなんてことは言わないでね。教科書より自分の頭にたよって答えなさい。はい、話しあって！（1分）やめ、さあ、大胆にまちがおうではないか。

話しあいはグループ4～5人でおこなった。しかしすべての考えはまず一人から始まる。自分で考え唇を動かしたのち話し合いに入らせるべきだと考える。自分の意見が持てぬときは、他人の意見に共鳴できれば、それを自分の意見として言うことをすすめる。その上で全体討論に移るわけだが、以下にその場面を再現させてみたい。

授業記録Ⅳ

P₁ えーと、アメリカの南部は綿花の栽培がさかんで、それで、南部の人だけでは労働力が足りなくて、だから、アフリカなどから奴隷を連れてきて、はたらかせて、で、北部の人は、奴隷解放を呼びかけたんだけど、奴隷をつれていかれたら、南部の労働力がたりなくて、仕事ができなくなるからダメだと言ったんじゃないかと思います。

T₂ かなり、いい線いってるんじゃないでしょうか。付け加えることはありますか？
絶対、おかしい、疑問だ、というのはありませんか？

いいけ？ はい、どうぞ、疑問をもつということは、大事だぞ。

P₂ 南部が労働力がいるということはわかったんだけど、北部には、いないんですか？

T₃ 北部には、いないんですか。いいこと言った。ちょっとまってね。それにしても、あなたが言ったことは、正しいことなんだよ。綿花を南部は作っている。北部は作っていないだよ。これは気候が合わないからね。つまり北は農業国なんだよな。

P₃ 南！南！

T₄ ああごめん。今のまちがい。はい、どうぞ。

P₄ 南は農業が盛んで、北は工業が盛んだから、いろいろ機械とか使って、いろいろ作っているから、そんなに黒人の奴隷を連れてこなくても、労働力は足りてると思います。

T₅ 工業で機械を使っているから、労働力は足りない。実際そうか？

P₅ えー？

P₆ んー？

T₆ 待て。前田君 (P₄) の疑問は、実に正答である。じつに、重要な疑問だけどね、今、ここを掘り下げると足りなくなるから、一応、今のところは、正解としておきます。何工業だったっけここは？機械工業並びに？

P₇ 鉄鋼。

T₇ ん、鉄鋼。それから？

P₈ 金。

P₉ 繊維。

T₈ 繊維工業や綿工業ね。工業としときますね。機械それから繊維。要するに工業よね。えー、南部はね、まあ、農業だから、人手は多いほどいい。ということは、この人達 (北部) はだから、客観的な立場に立つことができた。こちらは、もう切実だから、奴隷がいなかったら、彼らの農業は、干上がるというか、さっぱりだからね。絶対必要だったわけだね。だから、きれい事を言っておれなかったんだ。何をぬかすかという思いが、おそらく南部の人にはあったと。よろしいですか、これで。いいですか。

この問答 (討論) は、活発ではあるけれど、2つ問題があった。1つは北部は機械を使うから労

働力はいらぬとするP₃の意見をきちんと是正しなかったということである。北部はむしろ「自由な」労働力として黒人奴隷の「解放」を求めていたという一つの本音については後で深めたいと思ったのであるが。もう一つは、南部の黒人労働（プランテーション）の実態が具体的でない点、ホイットニーの綿繰機の普及等をスパッと捨象している点である。これらは、時間の制約から意図的にカットしたものである。（1987年の実践ではこの点生徒グループ発表で深めさせた。）

授業では、さらに自由貿易と保護貿易について問いを投げかけた。引き続き具体的なやりとりを提示する。

授業記録V

T₁ 保護貿易と自由貿易というのがある。

貿易の自由化というのを聞いたでしょ。自由貿易というのはね、勝手にやるんですよ、貿易を。どこの国とも、どんどんやる。企業も会社も勝手にやる。企業が、農民がどんどんとり引きする、自由に。外国のものがどんどん入ってくる。

T₂ 保護貿易というのは、それをバサッと統制するんだ。制限をつける。さあ、どっちかが、保護貿易で、どっちかが自由貿易なんだけど、どっちでしょう？

P₁ 北！

P₂ 北が自由貿易！

T₃ 北が自由貿易。南が……

P₃ 保護貿易……

T₄ それが違うんだ、これがねー。

P₄ 北が保護貿易（ザワつく）

T₅ ごめん、僕は結論をいった。何で北がいいの？はい。

P₅ やっぱり北の方が、南の方よりも発展してるし。当時は、イギリスとの仲が良くなって……

T₆ いいの？悪いの？

P₆ いいんじゃないかなと思うから、それで、予想なんですけど……

T₇ 予想、いいですよ。

P₇ それで、北と南は仲が悪いし、北の方が産業が発展しているから、それをどんどん機械などをとり入れて、それを発展させる……

T₈ わかりましたね。北の方が、発展しているイギリスと関係がいいから、自由にどんどん商いをすることができる。南部は発展していないから保護をしていく……。なるほど。

僕は、しかし、結論を先ほど言っちゃったからね、違うんだよね。違うんですよ。違うということを見抜いて判断して下さい。

P₈ えーと、奴隷を、一応、奴隷はモノって感じだから、奴隷を輸入するっていうのは、やっぱり保護貿易の場合は、何かしにくいんじゃないかなと思うから、その点で、自由貿易

じゃないかな……。

T₉ あー、奴隷を自由に貿易する。どれいはモノだよ、確かに。商品です。そのとおり。北が保護、南が自由。なぜか、当時世界最大の工業国というのはどこ？

P₉ イギリス！

T₁₀ イギリスですね、先進国。アメリカは、やっと発展し始めたばかりの工業国。日本は江戸時代……。そこで、実は、南とイギリスのつながりは大へん強かったわけです。はい、ちょっと見て下さいよ。イギリスと結びつきが強かったんです、南は。なぜかという、イギリスの方が、はるかに優秀な綿製品ができてきた。はるかに安く、優秀な機械ができてくるんです、イギリスは。当時はアメリカでも、ホイットニーの綿くり機というのが発明されてますが、製品や機械は一般的には悪い、高い。だから勝手に俺らは（イギリス）と取引する……というわけです。だから、まだ発達していない北部としては、勝手に、取引されたら困る。そうでしょう。我慢して欲しい。ちょっとボロでも我々北の製品を買って欲しい。そして、北にどんどん綿花を輸出して欲しい。やがて我々は、イギリスを追い抜くだろう。それまで我慢して欲しい、南部に。イギリスと、どんどん貿易するのはやめて欲しいというのが、北部の言い分。これはまさに、保護ですか、自由ですか？

全 保護

T₁₁ 保護でしょう。南部にしてみれば、いいお得意さんだよ、イギリスは。安くて、優秀な機械。勝手にさせてくれ、というわけよ。やがてですね、これがこうじてくると、南部は、もう、ごちゃごちゃ言うんだったら、俺らは分裂するぞと。分裂、独立するぞ、と言うわけ。アメリカ南部連邦というかな、南の国をつくるという宣告。

T₁₂ そういう動きになってくるんですよ。北は、何ですか？北は、当然、これは、統一してやっていこう、ということになるわけですね。これが厳しい対立なんですね。それから、前田君の間違ひは、非常に重要になるわけよね。イギリスと仲が良かったんです。そこで、ここに一人の男が登場するわけです。

ここでは、保護か自由かをイギリスとのかかわりにおいてそう考えさせようとした。機械の質などという問題よりも、いきなり奴隷貿易の統制か自由かという論点が出され、私は一瞬たじろぐのだが、これはこれで当然正解だし、生徒はやはり奴隷問題から南北対立を理解しようとしていることが分る。原料（綿花）の輸出、機械・製品の輸入ということについては、統計資料をぬきにしてイギリスとの関係をおさえていたのだが、やはり強引かもしれない。私としては、ここから次の統一か分裂かの問題をひきだしたかったのである。

ここで次の資料⑧を示した。

資料⑧（学習活動の7 T P 4）³⁰

リンカーンと黒人奴隷 この戦争におけるわたしの至上の目的は、連邦を救うことにあります。奴隷制度を救うことにも、亡ぼすことにもありません。もし奴隷をひとりも自由にせず、連邦を救うことができるものならば、わたしはそうするでしょう。そして、もしすべての奴隷を自由にするによって連邦が救えるならば、私はそうするでしょう。

（ホレス・グリーリーへのリンカーンの書簡，1862）

d. イギリスの動きと奴隷解放宣言の意味

ここでは、私は次のように授業をすすめていった。

「リンカーンにとっては、何が一番重要な問題なんですか。（黒板に）4つ書いた中で（産業構造、貿易、奴隷制、国家の統一）……統一ですね。統一してやっていくためには、奴隷を解放しなくてもいいと言いきっている。むろんリンカーン個人は奴隷制に反対だ。poor whiteの少年時代以来そうだった。心の暖かい正義の人だったと言われる。しかし政治家としてのリンカーンは別だったんだね、1862年当時ですら。しかし南部はこのリンカーンの言い分を信用しなかった」として、南部戦争の展開にもっていく。開戦後2年目にしようやくリンカーンは奴隷解放を宣言する。つまり2年間は、奴隷制をたなあげして、連邦（合衆国）の統一という期待を捨てきれなかったのである。これに対しては、ヨーロッパ労働者（やがて第1インターに結集する）からの批判や激励がよせられるのであるが、その点はあとにおいて、ここでは、イギリスとのかかわりを追求していきたい。生徒達の反応に注意しながら、以下の記録をみていただきたい。

授業記録VI

T₁ 工業だからね。持久戦になれば、絶対に北部優勢です。南部の方が先に準備していたんだけどね。そして、まさに、この「風と共に去りぬ」というこの映画、小説はですね、南部の立場から書かれたんです。どんどん負けていきます、後でね。さあ、そこで、一つの疑問が当然、浮かばねばならない。

P₁ イギリスはどうしたか？

T₂ ほお、すごいですよ、はい、どういうこと？

P₂ イギリスは、仲がよかったのに、どうして支援しなかったのか？

T₃ そう。イギリスは、最大の優秀な工業国であり、今、南部を失ったら、イギリスの工業は衰えるよ。何故、イギリスは南部に応援しなかったのか？君らがイギリスならどうする？応援、する？しない？

P₃ しない。する。

T₄ しない!する? すると思う人? するだろ?当然……

しないだろうか? ほおー。ちょっと待って。ちょっと話し合っ

P₄ (一話し合い)

T₅ やめ!いいですか。はい、まず、結論をどうぞ。

P₅ 僕は、すると思ったんだけど、やっぱりしない方に変えた。えーと、イギリスは工業国で、その時は、戦争に勝てたと思うけど、世界で一番の先進国だから、それは、結局、インドとか、いろんな所に、植民地を持っていて、しかも、アメリカの南部の方が崩れても、まだ、それでも、市場があるわけだから、南部の方には、しかも、えーと、そのまま戦わせた方が。そのリーダーを苦しめられるから、やらなかったと思います。

T₆ なるほどね。戦争があるから死傷者も、犠牲者も出るし、それに戦わした方が、アメリカが弱って、ライバルが落ち込んでいく。難しいね。弱点は、いろんなところに出てくる。3つぐらい……。

P₆ その、北部とかがライバルで、工業とか発達して、イギリスをこえるようなことがないように、南部に協力して、イギリスが、北部をつぶしてしまった方がいいと思います。

T₇ むしろ、その方が正解ではないか。どうです?他の人も参加させよう。どうですか?

P₇ どっちが勝ったら、どっちかが統一されるんだから、結局は、その文化もいろいろ入ってくるから、結局、最終的には、どっちも同じになって、どんどん発展していくから。

T₈ だから、君の結論。

P₈ 結局、味方した方がいいと思います。

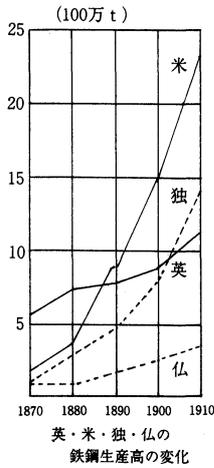
T₉ 南部にね。もう、北に勝たれたら困る。ということだけど……。はい、どうぞ。

P₉ 僕は、イギリスが応援は、しないと思う方なんですけど、南部が、勝手に独立すると、アメリカが、統一されなくて、滅んでしまうかもしれないから、だから、戦うよりも、北が工業がすすんでいて、勝つということがわかっている戦争だから、北部に勝たして、もう一回統一して、アメリカはイギリス人がつくったものだから、やっぱり、アメリカを滅ぼさせたくないという気持ちで応援しなかったと思います。

T₁₀ うーん。手の込んだ判断をしましたね。ちょっと待ってね。

T₁₁ 南部を応援すると、北部がよくなくなっていくというわけかね。自分達の子孫だ。だから、自由にやらしとけというわけかな。そしたら、統一されて、ビッグになるかもしれないけど、それはそれでいいじゃないか。アメリカをつぶしたら、もともこもないじゃないかと。皮肉だね。あと、二人ぐらいにとめよう。

P₁₀ 私も、イギリスは、応援しないという方なんですけど、そのとき、イギリスは、世界の先進工業国だから、その南部の農業と貿易をしなくても、フランスとか、他のもっとお互いにアメリカより、いい国がいて、いっしょに貿易をしていくのがあると思うから。

資料⑨³⁷⁾

上記の場面において、若干の時間をかけて討論しつつ導きたかったのは、イギリスの誰々にとっては戦争干渉がのぞましいのかのぞましくないか、イギリスといっても一色ではないことに気づかせる。このことである。

しかし討論の中でこれは中々でてこない。むしろ、論議は別の方向に走り始める。けれども真実に到達するにはまちがいや回り道も必要だろう。そこで次の資料を提示する。

次に私は次の問いかけをして生徒たちを追いつめていこうと考えた。

授業記録Ⅶ

T だってね、南部を失えば、イギリスの工業は、確実に、アメリカに抜かれるのではないか？抜かれないと思いますか。アメリカは……。抜かれたことを知っているでしょう、見てごらん。これがイギリス、これがアメリカです。ほら、ぬかれるでしょ、どんどん、イギリスは低迷している、アメリカはものすごい勢いで伸びている。南北戦争のあとですよ。北部の言う通りになった。南部よ、がまんしろ。俺らに協力しろ。そしたらイギリスも、ずっと追い越してやる。我らが世界一の工業国になってやる……って。なったよ。そして、にもかかわらず、我らのイギリスは、まさに、応援しなかったんです、南部に……。応援して、南部をバチッと植民地状態にしとれば、これに追い越されることはなかったかも。イギリスは、あとで、ドイツにも追い越されていくんです。だのに何故？

ここまで追いこめば、生徒は必死に考える。何故、干渉しないのか？しかし沈黙。出ない。私は黙って、板書「奴隷解放宣言」をおさえる。そこでようやく気づく者がでてくる。しかしすべてではない。

P₁ 「イギリス国内に反対があったんじゃないか。奴隷制に賛成するなんて……。」

P₂ 「外国の戦争に出かけて死ぬのはいやだし」

私が待ちのぞんでいたのはこの発言である。ここからさらに討論を深めたいのだが、もはや時間がない。最後は教師による語りこみに入った。

授業記録Ⅷ

T 南部の戦争は、ダーティー・ウォー、汚い戦争。こんな戦争にかかわったら、イギリスは、世界史から審判を受ける、という国際世論。イギリスの世論はね、反対したんだよ。特に、奴隷解放宣言が出てから、猛烈な反対をした。すでに勉強したじゃないか、イギリスの中で、労働運動の高まりがあった。チャーティスト運動。いったんしずまったとはいえ、労働者は力を強めていたからね。イギリスでもヨーロッパ全体で、自由と民主主義を求める動きは発展していた。だから、イギリスの資本家はものすごく応援したかったが、できなかった。奴隷解放、これが全面に出てこない戦争は、要するに単なる内戦でしょう、どちらが正義というわけでもない。しかし63年の解放令がついにでた。単なる内戦をこえて、世界史の前に進めるかどうかの戦争になってきた。そんな中で参加できなくなるわけよ、イギリスは。

私は結論の途中で、君たちがイギリス（人）なら、南部に参戦したかどうか、と問うているのだが、イギリスの誰ならという問いかけが、途中で必要だったかもしれない。国まるごとでなく、階級のちがいが物事を見る（階級的視点）というのは、生徒たちにとってなかなかむずかしいことのように思われた。

e. 自由への地下鉄道³⁰⁾

資料⑩

an illustration from *The Underground Railroad*.



ここで、「自由への地下鉄道」をとおって、南部から北部への逃亡奴隷が増加してくることを上記左の絵資料⑩によって説明する。つづいてハリエッタブマンの伝記を語りこむ。次に右の絵資料⑪によって、北軍の黒人部隊の活躍を描きだす。この際、映画「グローリー」にもふれる。すでにして北軍の勝利は決定的である。

終末は、北部の勝利の影響についてである。アメリカ資本主義は飛躍

的に発展していく。しかし黒人は真に解放されたのか？リンカーンの暗殺を語り、KKKの出現を語る。北部の機械工業で多くの労働者、低賃金な「自由な」労働力が必要であったこと、そのためにこそ奴隷「解放」も必要だったのだという把握をここでおこなう。差別が簡単に解消するはずがない。なお、シェアロッパーについては時間とのかねあいでカットした。

資料⑫³⁹⁾

Black troops defending Union positions
at Milliken's Bend, Louisiana, in June 1863.

資料⑬⁴⁰⁾

Go down, Moses, 行け モーゼ
Way down in Egypt land, (山を) おりて行け エジプトの地へ
Tell old Pharaoh, ファラオにつげよ
To let my people go, わが民を行かせよ(解放せよ)と
When Israel was in Egypt land, イスラエルがエジプトの地で
Let my people go あったとき
Oppressed so hard they could not stand 人々はたえがたい苦しみに
Let my people go うちひしがれていた
Go down, Moses, 行けモーゼ
Way down in Egypt land エジプトの地へ

最後に黒人の文化についてふれる。彼らの悲惨、彼らの願い、彼らの誇りについて感じさせたい。そのために、ハリエッタブマンともかかわる（彼女はモーゼと言われた）‘Go down Moses’（黒人霊歌）を自ら歌ってしめくくった。

七. 総括と課題

(a). 授業分析から見えてくるもの

「戦争」とか「奴隷」を抽象的概念にせず、具体的イメージとして生徒にせまること、これが本時の目標を達成するための前提として私が重視した点である。映画（ビデオ）や図版（OHP）を利用したねらいもそこにある。私自身が新鮮な感動をうけたものをえらんだのだが、生徒たちもよく集中して見入っていた。とくに資料①「風と共に去りぬ」と、資料④の右写真、そして最後の‘Go down Moses’が強烈であったようだ。導入の映画では、まず戦争とは人が殺しあい傷つきあうものであることを端的に示したかったし、あとの二つでは、悲惨さのみでなく、人間の怒り、誇り、絶望と希望への共感を育てたかったのである。授業中の表情や、授業後の感想（省略）で見るとこれにはあるていど達成されたといえそうだ。

しかし、感性的な把握だけに終ってはならない。ここぞというところでは論理的な把握をさせたい。つまり問答、討論の重視である。したがって授業記録も、この部分を中心に採録した。ふりかえってみると、ずいぶんのムダや脱線がある。しかしその試行錯誤が最終的な本質把握に必要なだと私は考える。「保護」か「自由」か、「統一」か「分裂」か、の論争のあと、生徒自身の口から「イギリスは（南部と）仲がよかったのにどうして支援しなかったか」という疑問がでたことは、授業の流れの中で私の問題意識が彼らにのりうった場面であった。しかし、その解明はむずかしい。たしかに試行錯誤は必要だが、教師自身の饒舌をそぎおとし、簡潔明瞭な応答、ヒン

ト(助言)の提示を与えることにもっと努力する必要がある。討論の決着はもっぱら教師の語りこみによってつけているのであるが、やはり適切な資料提示が必要であったろう。そのいみで、第1インターナショナルのリンカーンへの手紙(1865年1月7日、ザ・ビーハイグ・ニュースペーパー)はぜひ活用すべきであったと思っている。

総じて南北戦争、その対立や北部勝利の必然性を、黒人または「奴隷解放」の視点から見つめることはある程度達成されたと思うが、原住民(インディアン)とのかかわりについて深めることは不十分であった。この点は次に述べる。

(b). おわりに……新たなる実践をめざして

「自由で豊かなアメリカ」への憧れの意識は、たしかに近年単純でなく、かなりの陰影を伴うようになってきた。ベトナム戦争と前後してさまざまな社会矛盾が顕在化し、それが我々の意識に反映してきているのである。このような諸矛盾を現象的にとらえるのではなく、より構造的・歴史的に必然のものとしてとらえさせ、より本質的なアメリカ認識にせまるためのポイントとなるのが南北戦争の学習であると位置づけたのであった。

1時間の授業内容で見ると、富田氏の提起している第一・第三・第五の点についてはある程度留意したといえる。第四点については戦争犠牲の生々しさを映像的にはおさえたものの数量的な確認はさせていない。内乱のすさまじさ、今にのこる傷痕を考えさせるときこれは重要な課題といえる。

第二点の膨張政策については、冒頭の西部開拓でふれたのみである。これはベリーによる開国のところでしっかり学習させればいいのではないかと考える。

1時間の中での実践教育、これにさまざまな制約があるのである。

たとえば、黒人や専従インディアンの問題というとき、南北戦争において両者を均等に扱うことは困難ではないか。本実践は黒人に重点を置いているのであるが、インディアン問題を軽視したわけではない。むしろこの問題こそアメリカ理解の出発点ではないかとさえ思っている。富田氏「アメリカインディアンの歴史」⁴⁰⁾を一読したとき筆者自身今までのアメリカ像が大きく変わるのを感じた。アメリカの発展とは、もとをただせば原住民の虐殺・追放・掠奪の過程に他ならないことをあらためて知らされたのである。

1時間の授業というばあい、先住インディアンの問題は「アメリカの独立」で重点化すべきであると考え。誰にとっての独立か、独立の内実を白人と先住インディアンの問題からとらえさせ、生徒の認識をゆさぶるべきではないか。たしかに、彼ら先住民への抑圧がいよいよ激しくなってくるのは南北戦争前後からであるのだが、だからとてここにすべてを押しこめば、今度は黒人問題がうすれてくる。そこに一時間の授業の難しさがあるのであって、あえて上のようにわりきりたいのである。

子どもたちの興味・関心を高める工夫は、先行実践に学びさまざまな手法をとり入れた。映画「風と共に去りぬ」、物語「自由への地下鉄道」⁴²⁾・「アンクルトムズケビン」、さまざまな図版の

拡大コピー（TP）、そして黒人霊歌の歌唱である。ここで留意したのは悲惨さのみの強調におおらせないことである。それだけでは子どもたちに「気持ちが悪い」などと言って現実を避けたり、見下げたりする態度を育てかねないことがある。彼らの人間的誇り、美しさ、文化的高さへ共感も育てるとき、これを虐げるものへの怒りもわいてくると思うのである。これは、イメージ化したり語りこんだりするときの重要な視点だと考える。

それにしても先住民・人種差別問題は、アメリカのみならず、わが日本をふくむ「先進国」の原罪ともいえるべきものであり、歴史の発展の指標が文字どおり自由と民主主義の発展にあるとするならば、この暗部から現代を照らさないかぎり人間の未来や希望は語れないと思われる。その意味でも南北戦争学習の深化に今後さらにとりくむことが必要だと考えるものである。

八. 補論 学習指導要領の改訂と教材資料の提案

ここでは、今回の改訂を受けて、また、中学校段階の歴史教育の素材として、こと「アメリカ南北戦争」に関連して活用の可能性がある資料を以下三点に限って提案してみたい。

今回、1989年に改訂された学習指導要領をみると、中学校社会科の歴史的分野においては「改訂の要点」を説明する中で、「国際化への進展の対応」から、「わが国の歴史を世界の歴史を背景に学習させるという従前からの趣旨を一層徹底」し、「我が国の歴史」と「世界の歴史」を「各時代にわたる相互の交流や影響などを通して理解」させるものとしている。

また、「学習の全体を通して生徒たちにとっての身近な地域の歴史に関心をもたせ」ることが強調されている。⁴³⁾

これらの項目に留意してみると、南北戦争が、近代社会の形成に及ぼした影響を全体として日本史と関連づけるとともに、もっと具体的な接点をも見出す努力を要求しているものとも考えることもできるように思われる。

たとえば、アメリカの膨張政策に関連して、ペリーの日本への開港要求をとりあげるのは勿論だが、加えて、当時、日本人で、南北戦争期のアメリカを実際に体験した人の日記をじかにみることがのできるので、これを活用したい。

この人物は、1837年に播磨灘に面する小宮村生まれの漂流民「彦蔵」、ジョセフ＝ヒコとして知られている。

現在彼の記録は本人による「アメリカ彦蔵回想記」として残っているが、関連する記録の一部を次に紹介したい。⁴⁴⁾

1861年12月16日「船客たちはむさぼるように新聞に飛びついた。みんな戦争のニュースを知りたくて、うずうずしていたからだ。新聞記事の見出しは次のような種類のものであった。「ポトマック河畔のわが部隊、近く行動開始か」「大会戦せまる」「南軍兵力十万、ワシントンに進軍」「北軍の大佐、反逆罪で裁判か」「イギリス政府、合衆国政府にメイソンとスワイデルの引き渡しを正式

に要求」など

1862年1月7日(ワシントンのホテル)「食堂はにぎやかな光景を見せていた。どこをみても金筋入りの軍帽、肩章と金ボタンの人びとばかりだった」「しかもその話といえば、戦争のこと、大量殺人のこと、軍隊の動静についてであった。ボルチモアからの途中、ワシントンまでの道路上には、ほとんど切れ目なくテントが並んでいるのが目についた。そのテントの下にいる連中は大部分が新兵のようだった」

1862年2月6日(ボルチモア)「礼拝式からの帰りみち、ひょいと見ると町の中で大騒動が起こっていた、いったいどうしたのだと聞くと、セント・ポールの僧侶が、兵士たちに、教会から引きずり出されたのだという。この僧侶は南部連盟の大統領のために祈ったが、北部の大統領のためには何も言わずにいたらしい。これを聞いた兵士が幾人か立ち上がって、リンカーン大統領のために祈れとはげしく要求したらしい。」

1862年3月12日(ワシントンでリンカーンと会見)「大統領はすらりと背が高く、大きな手をして、黒みがかった髪には銀髪がまじり、すこしばかりほおひげをたくわえていたが、口のまわりは、きれいに剃っていた。黒いフロックコートをまとっていた。」

1862年9月5日(香港着)「アメリカの戦争がまだ続いていることを知った。マックレラン将軍がリッチモンドを攻撃したが、二万人の兵士を失って敗退し、大統領はさらに兵を召集したが、北部諸州の人たちは大統領を支持するのを拒否したとのこと。北軍の敗北のおかげか、香港にみなぎる社会一般の感情は、以前ほどアメリカ人に好意的ではなかった。交戦団体は双方とも、香港の港に一度に二十四時間をこえてとどまることはゆるされないという、イギリス女王の宣言がちょうど出たところであった。当地におけるアメリカの海運業も貿易もほとんどその姿を消してしまっていた。」

これ以降、彦蔵ことジョセフヒコの回想記には、太平天国の乱、四か国艦隊の下関攻撃、リンカーンの暗殺などが記されている。⁴⁵⁾

このように、日本人の、同時代の記録を使うことによって、親近感と、より強い臨場感を持たせて、授業が進められるものと思われる。

多少傾向が異なるが、田村貞雄氏の『日本史をみなおす』(青木書店1985. 12)の「鎖国時代の終末」や、春名徹氏の「鎖国と日本人」(『日本歴史の再発見』南窓社1985. 3)等は、ともに鎖国下における漂流民に注目し、これを通して世界史との接点を見い出そうとする視点を提起している。

つぎに、親近感という点でいえば、子供たちに身近なものとして、難波氏がとりあげた音楽の活用は今後さらに生かされていくべきであろう。ここでは、教材としてではないが、ジャズ「A列車で行こう」をとりあげる本多俊夫氏の指摘を紹介しよう。⁴⁶⁾氏は「単純に“ニューヨークの地下鉄の曲”であると考えることができないのです」として本田創造『アメリカ黒人の歴史』(岩波新書)より、「地下鉄道の『停車場』は輸送中の逃亡奴隷が一夜の宿をとる宿泊所であり、『終着駅』は奴隷制度のない北部や、北部よりもっと安全な『約束の地』カナダであった。逃亡奴隷をのせた列車

は、人目につくときは昼は湿地帯や山陰のしげみのなかに憩い、夜になると北極星をたよりに北への長い旅を続けた」と紹介したうえで「ここで述べられている地下鉄道」こそが、デューク・エリントンの“A列車”の、実は本体なのではなかろうか「デュークエリントンの作品を一貫して流れているのは、かつての奴隷の子孫たち—アメリカ黒人に対するかぎりない愛情であります」としている。

また、逃亡の地下鉄道の仲間たちと連絡信号に「黒人特有の調べ」を使っていたが、それこそが「のちにジャズ音楽の重要なエッセンスとなった「ハラー」であり「労働歌」であり、「スピリチュアル」であり、そして「ブルース」であったと」指摘している。

最後に、前節でも指摘しておいた、南北戦争の「戦争」としての犠牲の大きさ、とその意味についてであるが、今日にいたるアメリカ史上最大の死者を生み出した戦争であるとの認識は我々にとって希薄なのではないだろうか。

南北戦争が終結した1865年から、米軍が南部から引き揚げを完了するのは1877年、と12年後であることをもってしても、この戦いの傷跡の大きさがわかる。

また、地域との結びつきという意味では、猿谷氏は、アメリカ南部を旅したとき、ジョージア州アトランタで知人から「あなたは知らなかったの、日本の姉妹都市を。それはね、ここと同じように日本の南部カゴシマなのよ」といわれ「そういわれて、私はびっくりした。「日本の南部」というような表現を私たちは使わないが、ある意味で鹿児島がこのアトランタに類似していることに気がついたからである。薩摩もまた明治維新においては勝者の側にあり、西南戦争では逆転して敗者の立場にたたされ、その後、近代日本の主流から見放された。これまで全国平均に及ばない貧困地帯にとどまったことも似ているし、敗軍の将から全国的な英雄が出たことも同じである。」と感想を記している。⁴⁷⁾

猿谷氏の指摘をそのまま受け入れることは、鹿児島に住むものとして、いささか抵抗を感じないわけではないが、鹿児島県は、昭和41年以来ジョージア州と姉妹州県盟約を締結しており、その理由の中で「歴史的にみると、ジョージアはアメリカ合衆国を本質的に統一国家とした大内乱（南北戦争1861～1865）の中心となったところであり、鹿児島は明治維新の原動力となったところ」であるとして「両県州がきわめて類似したところをもっている」ところから盟約を結んだと説明している。⁴⁸⁾

このような視点からも、南北戦争を、日本史、地域と比較しつつ考察対象としていいのではないだろうか。

（注）

- 1) 梅野正信 川野恭司 「日本史における「荘園」制学習の考察」『鹿児島大学教育学部紀要 教育科学編』第41巻1990.3 P25
- 2) 鈴木亮『世界史の授業』1987 日本書籍 P118 無意識的歴史意識の形成と、これへの歴史研究者の責任に

- ついては、鹿野政直「国民の歴史意識・歴史像と歴史学」(『岩波講座日本歴史』24 1977)
- 3) 朝日新聞, 総理府, 日本放送協会実施の調査, 『図説戦後世論史第二版』1982 日本放送出版協会 P 176~179
 - 4) 村井吉年編『アジアと私たち』三一書房1988. 2 P 38~41
 - 5) 『近代日本教育小史』1973.10 草土文化 P 173
 - 6) 川上今朝太郎『銃後の街』大月書店1986 P 130
 - 7) 山中恒『子どもたちの太平洋戦争』岩波新書1986 P 148
 - 8) 文部省『初等科地理』下 昭和18年2月 P 134
 - 9) 国定教科書は五期に分類される。

I期	明治37年~明治42年	IV期	昭和8年~昭和15年
II期	明治43年~大正6年	V期	昭和16年~昭和20年
III期	大正7年~昭和7年		
 - 10) 唐澤富太郎『教科書の歴史』(昭和31年創文社) P 378
 - 11) 『教科書の歴史』 P 375
 - 12) 『教科書の歴史』 P 238
 - 13) 『教科書の歴史』 P 419~ P 421
 - 14) 『社会科教育史資料1』東京法令1974年 P 315
 - 15) 『社会科教育史資料1』 P 321
 - 16) 『社会科教育史資料2』東京法令1974年 P 361
 - 17) 『歴史地理教育』1976. 6 251号
 - 18) 『中学校指導書社会編』昭和53年 P 73~ P 94
 - 19) 高等学校の学習指導要領では、特に「南北戦争」に関して、比較的詳細な指摘がなされている。たとえば『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』(平成元年)では、世界史Bにおいて、「多人種, 多民族からなるアメリカ諸国の歴史では、移民の重要性に注目させるとともに、先住民族の抑圧, 黒人奴隷制, 少数民族差別等の問題も考察させることが望ましい」(P 70~ P 71) など,
 - 20) 『アメリカ史研究入門』山川出版 1974 P 1~ P 15
 - 21) 富田虎男・清水知久「アメリカ帝国の確立」(『アメリカ史研究入門』 P 159)
 - 22) 『アメリカ史研究入門』 P 162~164
 - 23) 『アメリカ史研究入門』 P 165 および『アメリカ史』清水博編 (『世界各国史』山川出版1969 P 324)
 - 24) 『アメリカ史研究入門』 P 171
 - 25) 大和田正広「アメリカ独立革命は市民革命なのか」(『歴史地理教育』399 1986. 7) 山室公司「アメリカインディアンの歴史」(『歴史地理教育』445 1989. 8) なども同様の試みといえる。
 - 26) 1987年の実践をベースに1990年6月20日(第二時限)に実践したものの記録分析である。ただし指導案は1987年のもの。鹿児島大学教育学部附属中学校2年4組 男子20名 女子20名
 - 27) 教育出版『中学歴史』1986
 - 28) 実践の展開では若干の修正あり、たとえば黒人霊歌をさいごに歌うなど。
 - 29) “Gone with the wind” アメリカ映画
 - 30) “Walt Whitman’s Poems” Edited by Gay Wilson Allen and Charles T. Davis, New York University Press, 1955 (川野 試 訳)
 - 31) 富田虎男「アメリカインディアンの歴史」雄山閣 1982
 - 32) 33) 猿谷 要「アメリカ歴史の旅」(朝日選書) 1987
 - 34) 35) There Is a River (The Black Struggle for Freedom in America”) by Vincent Harding, Harcovrt Brace Tovenovich, Pufbishers 1981.
 - 36) 『リンカーン演説集』(岩波文庫) 1957
 - 37) 『中学歴史資料集』(鹿児島県中社会全科研究会編) 1988.
 - 38) 39) “There is a River” by Vincent Harding Harcourt Brace Tovanovich Pufbishers, 1981.
 - 40) 『黒人霊歌集』谷 秀夫 編 (創学社) (川野 試 訳) 1964

- 41) 富田虎男『アメリカインディアンの歴史』雄山閣 1982
- 42) 『自由への地下鉄道』（ビルデガード・スウィフト 新日本出版社 1967)
- 43) 『中学校指導書社会編』文部省平成元年P 9～P10
- 44) 『アメリカ彦蔵回想録』（『世界ノンフィクション全集14』筑摩書房昭和36年）
- 45) 『歴史のとびら』（日本書籍1982）は、リンカーン・ヒコ・第一インターナショナルとのつながりを資料で紹介している。
- 46) 本多俊夫『ジャズ』P60～ 新日本出版社1976. 12
- 47) 猿谷要『アメリカ南部の旅』岩波新書1979. 3 P72
- 48) 『かごしまの国際交流』鹿児島県平成二年P146